幼年期―郷原直太の場合・其の壱　じっけん（中篇）

中村太郎

【七】

祖父文蔵の病死から二度目の春がめぐって来た。

六つになった直太は幼稚園を卒え、姉美奈子も通う小学校に入学した。入学とともに幼稚園の紺のスモックを脱ぎ捨てた代わりに、頭にはまだ当分大きそうな通学用の黄色い野球帽を被り、「ごうばる　なおた」と油性マジックで黒々と書かれた名札を左胸に付けて登校するようになった。その大きな名札は一年生だけの目印で、一組は赤で二組は黄色、そして直太の三組は水色がかった明るい青とクラスごとに色分けされていた。

しかし、直太の実質に変化は無かった。丸まっちくてぽちゃぽちゃした乳くさい顔も、肉づきよくぷちゃぷちゃ太った躰つきも、相変わらず。外見ばかりか中身も物心つくかつかぬかの幼児性は相変わらずで、言動の一々が頑是なかった。

たとえば、母節子が座っていると背後からじゃれついて甘える。割烹着の紐の結び目にまるで赤ん坊が母親の乳首に吸いつくようにしゃぶり付いた。それをみて父誠人から、

「はあァ、可笑しさ。こないだ小学校に上がったとに、まァーだ自分のかあちゃんにべちゃべちゃ甘えよっは、どこン子かね？　恥ずかしさア～！」などと当て擦られたくらいでは、平気で甘えつづける。誠人がさらに、「おやッ、誰かちおもうたら、うちの直太か？　うぇーッ、呆れた！　いつまっでん（いつ迄も）赤ん坊ンごつ甘えてから幼稚かねェ、くわぁーッ、うちの直太の幼稚さア～！」

幼稚という言葉を連発されると、さすがにムキになって、

「幼稚か奴が行くけん幼稚園ちゅうとやろ？　直太、もう小学校やけん、幼稚くなかばい！　そげな事もわからんおとうさんが幼稚かとたい――」

甘えん坊の直太が生意気な口を利くので、親たちは腹を抱えて大笑いしたが、ただ姉の美奈子だけはとても笑えぬどころか恨めしげに、

「いつまっでんそげなバカんごたる事ば為ょっけん（いつ迄もそんなバカみたいなことをしているから）、幼稚かちいわるっとたい！」

美奈子は、おなじ小学校に通うようになった直太が為出かした「愚行」のツケが、その姉である自分に廻って来ることを忌々しく感じて、それ以上の迷惑を被ることを恐れていた。彼女は早くから体面というものを重んじる質で、自分の体面

が直太に起因する恥辱で汚されることを非常に厭がった。また被害を受けそうだと想像しただけで、早くも情緒が不安定になって、

「直太、あんたねえ、またあたしにまで恥掻かさんでよ。おねえちゃん、あんたのせいでもう何回も恥掻かされて厭になっとっとやけん！　ほんなこて（ほんとうに）もう懲りごりしとっとやけんね――」ヒステリックな怒りに駆られるほどだった。

だが美奈子がいくら懲りても、肝腎の直太が懲りなければ意味が無かった。そして、美奈子をそこまで神経質にさせ、

「もう、こげな直太ンごたる奴が弟やら、ほんなこて厭やん！」

そうおもわせる元となった前例なら、逸話となって幾つも存在した。

たとえば、県立病院主催のクリスマス会では、大勢の親子が病院内の講堂に集い、踊りや寸劇のような出し物がステージ上で順番に披露された後、余興として今度は観衆が飛び入り参加し、即興で替え歌を披露する場面があった。本歌は「レッツ・キッス、頬寄せて……」という当時の流行歌だったが、直太が手を挙げるとマイク越しに、何と、

「ちんぽ、おしり、おっぱい、うんこ、しっこ、おなら……」

これらの単語を勝手な節をつけて連呼しはじめた。会場内はどよめき、やがて割れんばかりの爆笑、それも失笑を主成分とする哄笑の嵐が渦を巻いた。好奇の目が忽ち直太に集まったが、直太はうれしそうに笑っていた。が、その横で美奈子は、石のように凝り固まって恥辱の時が過ぎ去るのを待つより他なかった――。

また授業参観の日にも、美奈子と級友たちが保護者らに見まもられながら授業を受けている最中に、「ずんずんずんずん、ずんずんどっこ……」。親に連れられて来た幼児が退屈のあまり痺れを切らして歌いはじめた。当時流行っていた「ズンドコ節」で、声の主はもちろん直太。教室ぢゅうがざわめいて、やむなく授業は中断し、級友たちが笑いながら後ろを振り向いては、「アレ誰、ねえ、誰の弟……？」などと目引き袖引きいい合っている間にも、美奈子は恥ずかしさのあまり脂汗がにじみ出て、穴があったら入りたいとはこういう事をいうのだと慣用句の意味を実感した――。

いずれも大人たちから見たら、

――学齢期前の未だ物心つかぬ幼子というものは、頑是なさにまかせて、マア突拍子もないことをするもんだ。

無邪気で他愛もない悪戯、つまり笑い事で済んだ。だが、美奈子にとって顔から火を噴きそうな赤ッ恥を掻かされた事実は、けっしてただ笑って済ませ得るようなものではなかった。直太のせいで恥辱にまみれ慙死しかけた体験は、どんなに忘れたくても、忘れようとすればするほど忘れ難い記憶として銘記され、自身のことは、

――運悪く恥を恥ともおもわぬ愚かな弟を持ったばっかりに、その飛ばっ散りに悩まされつづける、憐れで、惨めな姉

……。

そんなふうに自覚されるに至った。そして、直太によるその種の愚行がまたいつ何どき繰り返され、そのツケがまたいつ何どき自分に降りかかって来ぬとは限らぬのだとおもうと、なにを為出かすかわからぬ弟直太が自分の通うおなじ小学校に入学して来たこと自体が、不幸の前兆のようにも感じられてくるのだった。

だが、そんな直太のする事為す事のうち、やはり特筆すべきは何にもまして、

――じっけん。

すなわち耐久実験だった。直太のその「じっけん」では、怪獣や戦闘ロボットなどをかたどった模型玩具たちが善玉と悪玉、敵と味方とに分けられ闘争の劇を演じさせられた。その独り遊びに興じる中で、物としてのそれらがいったいどの程度の強度や耐久性を持つか、実際に試してゆくのだった。そこがこの「じっけん」の「じっけん」たる所以で、おもちゃたちの見かけがどんなに強そうで恰好よくても、強靭さに欠けすぐ壊れたり、耐久性不足でもちが悪かったり、そんな見かけ倒しの粗悪品なら、

――こげな事っじゃつまらん、さっさと壊れっしまえ！

ただ、この「じっけん」が抱える大きな問題としては、直太が物の強度や耐久性の程度を見極めたと、その見極めがついたとおもった時には、すでに壊れるかその半歩手前までいってしまっているのだった――。

結果がそれなら、そこへと至る過程でも直太の「じっけん」には特徴があった。

直太はその「じっけん」の最中、その闘争の劇に登場する模型玩具たちが各場面ごとに口にしそうな台詞を即興で挿入してゆくのはもちろんの事、むしろそれ以上の熱心さで珍妙かつ滑稽なオノマトペ（擬音語・擬態語の類）を、「ぞぎぞぎぞぎ、ぞぎぞぎぞぎぞぎぞぎ……、ずしゅん、ずしゅん、ずしゅん……」などと自ら発して、その独り遊びを絶えず景気づけ不断に盛り上げた。とくに演じられる劇がクライマックスを迎え戦いが白熱して緊迫感を増してくると、「……ぎゃしん、ぎゃしん、ぎゃしーんッ……、じゅッ、じゅばッ、じゅばばばばばぁーん……、がっばぁーん、ぴっしゃあーんッ……！」。傍で聞いていて、いったい子の音感はどうなっているのかと不思議におもえるほど、そのオノマトペは多彩を極め、しかも芸が細かくて生々しかった。未だ年歯もいかぬ幼子が、年齢相応の無邪気な児戯に無我夢中で興じているにしては、いささか過激で奇妙なほど真に迫った感じが付きまとった。

祖母久代などはそれを聞いて、

「何かおろ善かつにどん（「おろ」は否定語。善からぬ物の怪にでも）取ッ憑かれとらんなら良かばってん……」などと薄気味悪がった。「もし取ッ憑かれとんなら、拝み屋の婆しゃんばいうて来て、拝んで（加持祈祷して）もらわんば出来

んよ！」

物の怪の関与を疑う辺りは文字どおり老婆心というものだが、久代を不安にするくらい鬼気迫るものがあって、おもちゃたちにとってみたら強度と耐久性を情け容赦無く試される、苛酷極まりない「じっけん」なのだった。

直太自身が「じっけん（実験）」という言葉とその概念に初めて触れたのは、小学校に上がって間もなく、一年三組のクラス担任となった古賀朋美先生が校舎内を案内してどこに何があるか教えてくれた、校内見学の時の事だった。彼女は、濃い赤のセルロイド縁の眼鏡を掛け福々しいほど丸々と肥った、すでに五十代も後半とおぼしき経験豊富なおばちゃん先生で、直太たちのような未だ幼児っぽさが抜けぬ低学年の児童を受け持つには、彼女のようなベテラン教師が適任との定評を得ていた。そんな朋美先生が、直太たち一年生の教室もそこの一階にある、竣工して間もない鉄筋コンクリート三階建ての南校舎、そこの三階にある理科実験室を案内してくれたときに、その実験室が学校にあることの意義を、

「世の中にゃ、頭の中で考えたり想像してみたりしたっちゃ、やっぱり実際にやってみらんばわからん事の、いっぱいあっでしょうが。たとえば、皆さんが五六年生になったら魚の躰の仕組みば勉強しますが、教科書に載っとる絵や写真だけ見よったっちゃ、ほんなこつぁようわからん（ほんとうの事はよくわからない）。ばってん、解剖ちゅうですが、本物の鮒なら鮒のお腹なんか実際に切り開いてから、中身ば観察して調べてむっと、ほんに良うわかっとです。だから、実験は大事なかとです（実験は大事なんです）――」

そんなふうに実験の必要性と意義を説くのを聴いて、直太は、「これだ！」とおもった。自分がこれ迄に行ってきた事は、あの善と悪が相剋つ闘争の劇に紛れて、鮒の解剖実験ほど直截的ではなかったが、やはりその実質はおもちゃたちの強度や耐久性をとことん見極めようとする意味で、まさしく、

――じっけん。

そう呼ぶに値する行為だったことに改めて得心が行った。

――ほんなこて試してみらんば、ただ見ただけじゃわからんばい！

その点、市販のおもちゃたちの大半が見かけ倒しにおもえた。買って貰って暫く経つ間にやおら「じっけん」を試みると、マアいかに脆くて、はかなくもむなしい物象どもであることか――。幼い身空で一種の虚無感じみた憂鬱も味わっていると、そんな時だ、あの懐かしい祖父文蔵の声がまた耳元で囁きかけて来るのは。

「おーい、直太ァ、また物ば壊しょらんか、おもちゃば、あア？」例のあのちょっとからかうような口調で、「おもちゃでん何の道具でんおなしぞ、手荒う扱うとすぐ壊るッ。ばってんが、手加減して、力ば加減して、やさしゅう扱いよっと長もちすッ。なア、そうやろが、直太。物ば大事に為ぇろよ――」

すこし前迄の直太なら、自分は手荒くなど扱ってはいない

のだ、それでもおもちゃがひとりでに勝手に自然と壊れるのは、ひとえにおもちゃが脆弱すぎるのだ！　そういってムキになって抗弁した。そんな直太の実感そのものは変化せぬどころか、確信となっていよいよ強まる一方だったが、この頃ではもう一々反発する気も起らず、

「うん、わかっとる。直太、手荒うやらしよらん。ふつうに遊んどるだけやん」適当に受け流す術も覚えた。もとより嘘をいっている自覚は無い。

――ばってん、壊るっ物な、どのみち壊るっとやけん、為様ン無かろうもん。

直太におもちゃを酷使している自覚など無くて、ごくふつうに遊んでいるつもりでも、いつの間にかおかしくなって、気がついたらもうどこかしら壊れているのだ。それが腹に据えかねてついちょっと手荒く扱うところを、祖母久代なんかに見られようものなら、

「直ちゃん、あんた、荒か！　そげん手荒う為ょんなら壊るッ！　あんたンごつ物ば粗末に扱うて、勿体なか事ば為ょっと神罰の当たるよ！」

――勿体ない事をすると神罰が当たる。

この台詞は彼女の口癖になっていた。

そして、神罰が当たるといえば、まだ直太が小学校に上がる前、辰ちゃんこと井口辰也という遊び友達が掘割を放尿して穢したら、その日の翌朝には早くも彼の小さな陰茎がぷっくり腫れ上がったのを、地元で拝み屋の婆しゃんと呼ばれる呪術者に祈祷して治してもらったそうな。その話を聞いて以来、直太は「神罰が当たる」と聞いただけですぐ、条件反射的に下腹部がムズムズしてきて、

「すぐそげんいうけん、もう、ばあちゃん厭やん！」

直太としては、勿体ない事をしている自覚など無いか、あっても薄い。

――だけん俺がちんぽ腫れたりしとらんめえが……。

むしろ責められ罰せられるべきは、見栄えがする割にはすぐ壊れる見かけ倒しの粗悪品を大量生産し、子供の眼を欺き心を惑わして売りつける、そんなあこぎな大人たちであるはずだ。そもそも彼らがもっと頑丈に造ってさえおれば、「じっけん」などせずに済むのだ。だが、彼らの造る主に合成樹脂で出来た玩具と来たら、買い替えさせるためにわざと壊れやすく造っていはすまいかと勘繰りたくなるほど、直太にとっては脆弱なのだった。

合成樹脂製のおもちゃに対して、

――ぷらっちっく（プラスチック）で出来とっとやら、どうせすぐ壊れてしもて長もちゃせんとやけん……。

いよいよ愛想が尽きかけたころ、直太は父誠人が持つ肥後守――簡素な造りの小さな折り畳み式ナイフ――に心惹かれていった。誠人が日曜日の午前中など、江戸の古川柳を大学ノートに書き写し、その解釈を記すために鉛筆を一本ずつ丁寧に削っていると、その様子を傍で飽かず眺めていることも

あった。その視線の先には、父親が慣れた手つきで操るその肥後守があった。

「直太、とうちゃんが小刀ば扱いよるときに手ば出しちゃ駄目ぞ。指がチョン切れてポロッち無うなったら、厭やろ？」

「うん、直太見よくだけェ――」

その和式小刀は、台所にある菜切り・出刃・柳刃なんかの包丁類と比べてもずっとずっと小さかった。しかも二つ折りにして刃を柄の内側に納えば、父親の拳の中に隠れてしまうほどだ。だが直太の眼には、適度に反った刀身を中心にその全体の形が、いかにも武骨な感じがして頼もしく恰好よく映った。

「ねえ、そン小刀よう切るる？」

「うん、よう切るったい、鉄と鋼で出来とっとけん」

「ハガネ？」

「うん。普通の鉄よりも硬か、鉄たい」

「ふうーん……」

「どら、来てみん。こン鉛筆ばいっしょに削ってみろかね――」

直太はあぐらをかいて座る誠人の脚のうえにちょうど座椅子に座るように腰掛けた。父親は背後から直太の丸っこい小さな躰を自分の躰で包み込むようにして、右手に肥後守と左手に新品の鉛筆とをそれぞれ握らせた。そして後ろから息子の小さな手に手を添え、小刀の研ぎ澄まされた刃先を、鉛筆の六角柱の角の一つに斜めの角度から喰い込ませた。そうしておいて、グイッと刀身をそのまま前に押し出させた。すると小気味よい手ごたえとともに、表面を濃緑色に塗装された外側の木で出来た部分が芯の近くまで一気に削れ、新鮮な感じの木の断面が現れた。

「ぶぅわいたア～ッ！」直太から感に堪えたような驚嘆と歓喜の無邪気な声がもれた。

鉛筆を徐々に回転させながら、今の要領で六つの角々をひととおり斜めに削り終えると、刃を滑らせるようにして剥き出しになった芯の周りを少しずつ削り、先を適度に尖らせてゆく。やがて、

「ほら、これで一本研げたろ」

誠人は、使い方次第では凶器となる刃物を安全に用いる術を直太に手ほどきし、満足感そうにいった。

「うん――」直太は、円らな目でその肥後守と研げたばかりの鉛筆とを見比べながら、首肯いた。父親の助けを借りて、自分が今どうやって鉛筆を研いだか、その手順を反芻している様子だった。幼稚園の時分から鋏なら使いつけていた。だが、刃物らしい刃物を使って作業したのは初めての体験だった。むろん、直太が一人前に小刀を操って鉛筆を削れるようになる迄にはまだ先が長くて、相当な時間と経験とを要するのだが、鉄と鋼で出来たその小刀は、直太の中に次のような新たな観念――憧れと願望と目標を植えつけた。

――鉄は、プラスチックてろん何てろんとは全然違うて、ずっと硬うして強かとやけん！　おまけに小刀ちゅうたら鉄

と鋼で出来とるとやけん、こげん鉛筆の木でん芯でんシャカシャカ削るッ！　あア、俺ィもこげな肥後守ンごたる俺だけのナイフば買うて、我が良かぁごつ使うてみろごたア～（自由自在に使ってみたいものだなア～）！

【八】

入学から暫く経った、ある日の事――。

その日、直太は担任の古賀朋美先生から放課後に残るようにといわれ、居残り補習を受けた。算数の簡単な足したり引いたりの操作が、りんごやみかんの増減だとまだなんとかわかるのに、数という抽象概念に還元された途端、急に澄まし返った感じで取っつきにくく、うまく呑み込めなくなるのだ。そんな子供が直太以外にもあとふたりほど居残っていたけれども、直太よりは早く要領を掴んで先に帰って行ってしまった。だからそこからは、直太ひとりのための個人授業という体裁になった。直太が数の観念にようやくすこしは慣れてくる迄、朋美先生は丁寧かつ根気強く付き合ってくれた。

その補習もやっと終わり、帰りは為方なく独りぼっちでランドセルを背負ってとぼとぼと家路を辿るうち、道端で珍しい拾い物をしたのだった。

その物体がいったいどういう氏素姓の、いかなる用途で使われる道具なのか、直太にはわからなかった。ただ、それに眼が留まった刹那に鋭く閃くものがあって、おもわず手に取り拾い上げていた。手にズシッと来る鋼鉄の塊は、おなじ鋼鉄は鋼鉄でも父親の肥後守の刀身、その鋭く研ぎ澄まされた刃物よりもはるかに重厚感でまさった。

――これならどげん手荒う扱ったっちゃ、壊るっ心配やら無かろ！

その物体は、どうやら金槌やハンマーのように木製の柄をすげて使う道具の、頭の部分らしかった。だがその柄を根元から無残に折れ欠いて、折れ残ったわずかな部分がトゲトゲした断面を見せ、不用意に触れると指や手に突き刺さりそうだった。だがもっと特徴的だったのは、形が鉤爪状になって先が尖り、何か武器的な物を直太に想わせたことだ。仮にもしほんとうに武器なら、生身の躰にその尖端部を打ち込んで突き立て殺傷する、相当に残酷野蛮な武器にちがいない。

次に想い浮かべたのは、獲物を捕食するために発達したティラノサウルスの牙や爪だった。暴君竜というだけあって、それがかつてこの地球上に実在した猛者揃いの肉食恐竜たちの中でも最大最強といわれる、極めて獰猛な種類だったらしいことを、直太は知っていた。入学祝に長崎で大学教授をしている伯父から貰った、全五巻からなる豪華な「動物図鑑」のうち、「古代生物」の巻にはその暴君竜が狩りをする模様を描いた想像図が見開き二頁にわたって大きく載っていた。それをみて直太は、忽ち暴君竜のご贔屓となった。その二足歩行する肉食恐竜の巨大な頭部には、それに見合った巨大な顎と口が付いていて、上下の顎にはいかにも捕食者らしく、獲物の躰を咬み裂いて喰らうための鋭利な牙がずらりと並ん

でいた。また、他の部位に比べ異様に小さく貧弱に見える前肢にも、二本の指の先に獲物を引き裂くナイフのような鉤爪が付いていた。そんな牙や爪の餌食にはなりたくないもんだと戦慄を覚えながらも、魅入られてゆくのを覚えた。

それらの物騒な物の事をぼんやり想い浮かべながら、その鉤爪状のいかにも頑丈そうな鋼鉄の塊を喰い入るようにみていたが、持ち帰ることにした。

――これなら壊るっ心配やらじぇったい無かろたい！

その「壊れない」の一点が、肝腎なのだった。直太がこれ迄に手にした物のなかで、それは頑丈さにおいて比類無き頼もしさという点で異彩を放っていた。くわえて、直太が妙に心惹かれる形状をしており、大きさ的にも直太が小さな両掌を並べたくらいの寸法に収まり、まことに都合が好いのだった。ゆえに、

――あア、こげんとば（こんなのを）ずーっと探しとったとやった！

そう想い為すまでに至った。いったいどういう氏素姓の、何に用いられる道具かはやっぱり謎だったが、小さな掌でぎゅうッと握り締めて持ち帰った。

途中で幾度か、周囲に人目が無い時を見はからっては、様々な角度から観察した。何に見立てるかで遊び方が決まるので、その形が何に似て見えるかは、直太にとって殊の外重要な問題なのだった。さっきはティラノサウルスの牙や爪に擬したが、

――牙か爪の一本きりじゃ、どげん為様も無か……。

その鋼鉄の塊を直太の例の独り遊び――善悪が敵味方に分かれて相剋つ闘争の劇――の主役の座に据えて遊ぶには、もっと何か別な、直太の魂がうまく憑依しやすい魅力的な何物かに見立ててやる必要があった。

こうして一計を案じるような際、直太の想像力は融通無碍にはたらいた。そのうち、折れ残った柄の断面を上に向け、目の高さに持ち上げて横から眺めていると、摩耗してだいぶ丸みを帯びてはいても、尖端部が船の舳先（船首）っぽく見えはじめた。そうなると後ろの丸くなった部分は艫（船尾）ということになり、波頭を雄々しく劈いて航行する一隻の艦船を空想ないし幻視していた。

――分厚い鋼鉄製の装甲を鎧った軍艦！

それは直太にとって想像力の勝利だった。

が、それが直太の意識野において「軍艦」として通用するためには、折れ残った木製の柄の断面を何とか処理する必要があった。また安全上も、そのササラ状のトゲトゲを擦り切ってしまうなり擂り潰してしまうなりして、手指を傷つけぬようにする必要があった。

学校から帰るとまず「ただいま」の次はすぐ「今日のおやつ、なん？」が一連の挨拶だった。ところがその日ばかりは様子が違った。帰り着くなりランドセルを濡れ縁の上に放っぽり出すと、玄関の戸も開けずにその為事に取りかかった。

その濡れ縁の下には岩のような大きな沓脱石が鎮座していて、その前にしゃがみ込むと石のザラザラした硬い表面に、トントントン、トントントン……と、その鉤爪状の鋼鉄の塊から突き出た、折れ残った柄の断面を打ちつけてみた。暫くそうして手が痺れてきた頃に断面をみると、わずかながらも効果が見られた。そこで今度は、打ちつけるのではなく押しつけておいて、石の表面を手前から奥に、奥から手前に……と往き来させながら、摩擦を加えてみた。ギシッ、ガシッ、ギシッ、ガシッ、ギシッ、ガシッ……。ひとしきり続けてからまた断面をみると、トゲトゲの先がさっきよりは擦り切れてきていた。

――こンやり方でずっと為ょっと良か！

とはいえ、木の材質がよほど硬くて手剛く、その断面が平らになる迄には相当な頑張りを要する根気為事となった。その作業は直太に、「トントン粉」を想い出させた。トントン粉というのは、赤煉瓦の破片などを丸っこい石で根気よくトントンたたいて打ち砕き、さらに石臼で挽くように粒を細かく擂り潰して、最後は滑らかな粉に仕上げるという、ほとんどただそれだけの遊びだった。

直太が通った浄土宗のお寺の幼稚園には、本堂の前に一枚岩から削り出した大きな水盤があって、その水盤の縁にはご飯茶碗の底のような丸い凹みが幾つとなく彫られていた。直太たちはその凹みを擂り鉢代わりにして、そのトントン粉に熱中した。赤煉瓦を赤褐色の粉に挽いても、砂場の砂に混ぜて色の配合を愉しむくらいが関の山だったが、不思議と飽きなかった。

だが、直太が取りかかったその為事は、トントン粉よりもはるかに骨が折れた。トゲの一本一本が硬くて石の表面と擦れ合ってギシギシ軋む音といい、一々引っかかるような手ごたえといい、心地好さからは程遠くむしろ不快なうえに、成果が現れにくい辛気臭い作業だった。それでも投げ出さずに、直太は作業を続けた。つまりは、姉美奈子のいう、

――馬鹿の一つ覚え。

飽きっぽいなんて、誰がいった？　トントン粉以来、単純作業の根気為事は意外と厭わない。黙々と打ち込んだ。だがそのうち、トントン打ちつける際には「ぎゃしんッ、ぎゃしんッ、ぎゃしぃ～んッ……」、ギシギシ擦りつける際には「ぞぎぞぎぞぎッ、ぞぎぞぎぞぎぞぎぞぎッ……」。直太の独り遊びには付き物の例の珍妙なるオノマトペが、まるで景気づけのように発せられているのだった。「ぎゃしんッ、ぎゃしんッ、ぎゃし～んッ、ぞぎぞぎぞぎッ、ぎゃしんッ、ぎゃしんッ、ぎゃし～んッ、ぞぎぞぎぞぎぞぎぞぎッ……」

すると母節子が、擦りガラスの嵌まった引き戸の外の物音と、人が動く気配に気づいて顔を出し、呆れ顔で、

「なんね、あんた、やっぱり帰って来とったとね。ただいまもいわんで……」

頭上からの母親の声に、直太は、

「あん――」虚ろな一瞥と生返事で応じただけで、また速や

かに手元の為事に戻っていった。
「あんた、さっきからそこで何ば為ょっとね？」
訊いても、返事が無い。そこで、直太の気を惹くように、
「おやつに芋かりんとうがあるばってんねえ――」
だが直太は、やっぱり耳に入らぬか、入ってもトンネルと化した頭の中を素通りするらしく、無反応。好きなおやつで釣ろうにも見向きもせぬほど、いったい何に気を取られているのか？　節子は最近やや目に見えて膨らんできたお腹を庇いつつも縁側に膝をついて、直太の手元を覗き込んだ。
「あら、あんた、そら何ね？　……おかあさんがそら何ねェち訊きよるとに、直ちゃんにゃ耳が無かとかね……」
すると、ようやく、いかにも面倒臭そうに、
「知らん――」
たったそれだけ、ぼそっと答えた。節子は為方なく、暫くは息子の手元に見入っていたが、やがておもむろに、
「あんた、そら……、とびぐちやなかね？」
すると現金なもので、直太は、急に何か大切な用事でも思い出したように顔を上げ、
「えッ、何ちゅうた？」初めて反応らしい反応を示した。
「えッ、いまこれン事ば何ちゅうたと、ねえ、おかあさぁん？」急き込んで訊き返した。
「とびぐち、たい。と・び・ぐ・ち……」
すると直太は、
「とびぐち、とびぐち……」まるで発音するときの舌や口の中の感触でも確かめるかのように、その名を繰り返し呟いていたが、
「へえーッ、とびぐちいうと？　何ば為っときに使うと？」矢継ぎ早に質問を投げかけた。「ねえ　何ば為っときに、どげんやって使うとォ？」
その鋼鉄の塊は、なるほど「とびぐち」というだけあって、形が鉤爪状で猛禽類のくちばしを想わせた。
「おかあさん、こンとびぐちちゃ何に使うとねて？」
直太がいよいよ焦れて可笑しいくらい真剣に問い質そうとするのをみて、節子は、殊更に勿体つけるではないが、
「アラあんた、そげん汚かバイ菌がいっぱいのジゴ洟（粘度の高い鼻水、俗にいう青洟のこと）ば溜めてグシュグシュいわせよっと、蓄膿症になるよ。ちょっと、ホラこっち来なさい……」そういいながら割烹着のポケットからチリ紙を取り出すと、「はい、全部かみ出しなさい！」抱き寄せた幼い息子がうるさがるのも構わず、その低くて小さな丸い鼻に当てがってから、「ハイ、ふ～んッ！　ホラこっちも、ふ～んッ……」と左右の穴から片一方ずつかみ出させた。「あらッ、汚さア～ッ、こげん埃ば吸い込んどった！　あんた、こげな埃だらけの洟汁ばグシュグシュいわせて溜またまんましとっと、鼻の穴の奥にバイ菌が入って蓄膿症になるたい。ばってん、もうこれでスッキリしたろたい？」
こんな時、ふだんの直太ならこの子の癖で、自分の躰から排泄された物を、汚いのをそれと知りつつ、わざわざ見よう

とするのに、今はそれどころじゃないらしい。
「おかあさん、ねえ、とびぐちて何に使うと？　ねえねえ、何に使うとねち訊きよるやん！」
「とびぐちていうたら、火消しやらとび職の人やらが使う、昔からある道具たい。ほら、丈夫か鉄で出来とって、先の尖っとろが。それが木で出来た柄の先に付いとって……」
母親は身ぶり手ぶりも交えながら、火災の折など延焼を防ぐための非常手段として、家屋をわざと破壊したりする際に用いる道具だと説明した。「だけんホラ、柱や壁に突き刺さるごつ、ここの先ンところが鋭く尖っとっでしょうが」
「うん、尖っとッ」いったん首肯いたものの、そこを指の腹で撫でながら、「……ばってん、もうあんまし尖っとらん」
「そらぁもうずうーと長いこと使われとったとやろたい。それで、先が擦り減って丸みがついとっとだろたい……」
そのうえ柄が折れたものだから、用済みのお役御免となって廃棄処分されたのだろうという、母親の推測から成る説明に、直太はその「とびぐち」を見詰めながら耳を傾けていた。
「ふうーん――」
とにかくこうして直太は、彼が下校途中で拾い持ち帰って来た、その鉤爪状の鋼鉄の塊の氏素姓、用途からおおかたの経歴に至るまで知ることができた。母親の説明が正しければ、酷使に耐える頑丈な造りなのも当然だし、そのまず壊れそうもない造りが、彼女の説明に説得力を添えているようだった。やっぱりもうこれ以上はどう壊れようも無いのだから、これぞ無類の丈夫さなのがうれしくて、直太は満足した。後はもう、学校帰りにどの辺で拾ったのかとか、そうやって沓脱石に打ちつけたり擦りつけたりしてどうするつもりなのかとか尋ねられたが、ロクな受け答えもしなかった。母親は再び根気為事に取りかかった直太の手元を暫く見まもっていたが、ひとつ大きく溜め息を吐くと、「晩ご飯前に宿題もせんといかんよ――」といい残すとガラス戸を閉め、家の奥の台所へと引っ込んだ。程なく、またあの「ぎゃしん、ぎゃしん、ぎゃし～んッ、ぞぎぞぎぞぎぞぎぞぎッ……」といった直太独特のオノマトペが聞こえはじめた。

それからの四五日間は毎日、学校から帰るとそのとびぐちの頭に折れ残った柄の残骸、ササラ状になった断面を相手に格闘しつづけた。その断面のトゲトゲを、濡れ縁の下にある沓脱石に打ちつけたり擦りつけたりして、擂り潰すか削り落とすかすることに幼い心血と手間暇を注ぎ込んだのだった。
途中、近所の子が「直ちゃん遊ぼぉ～い」といって誘いに来ても、見てのとおり今は忙しくて遊べないといって断った。そして、手元ではトントントン、ガシガシガシ……とやりながら、「ぎゃしんッ、ぎゃしんッ、ぎゃし～んッ、ぞぎぞぎぞぎぞぎぞぎッ……」。口走るオノマトペも景気よく精を出す、直太だった。
そんな直太の身も世も無い様子を、祖母久代などはまた例のごとく、「こらいよいよ、おろ善かつにどん（善からぬ物

の怪にでも）取ッ憑かれとりゃせんかね？」と心配顔で怪訝そうに見ていたが、直太は意に介さなかった。例の「じっけん」を行ってゆく中で、手にするおもちゃというおもちゃがいずれも脆弱性をさらけ出して次々と壊れていった際には、それが祖母のいう物を無駄にする勿体ない行為だとするなら、「神罰の当たって、ちんぽの腫れどん為ンなら（腫れでもしたら）、どげんしょ？」と不安にもなった。しかし今や、そのとびぐちの頭こそ、彼が探し求めてきた当の物であり、「じっけん」は、それと出逢うための手段だったという、その確信を深めつつあった。つまり、

――じぇったい壊れん、俺だけのばさらか（とても、たいそう、非常に）強か、良か宝物。

その途中、鋼鉄の塊を握り締めた小さな掌の、まだやわやわとした皮膚がヒリヒリ痛みだしたが、直太は我慢してしぶとく作業を続けた。痛んだ箇所には水ぶくれのマメが出来た。マメの皮が破れたら赤剥けして、よけいヒリヒリした。だから、力がそこ一点に集中しないよう当たる位置を微妙にずらすなどしながら、作業をつづけた。その苦労の甲斐もあって、

――虚仮の一念岩をも通す。

ようやく手にトゲが刺さらぬ程度には為上がった。おもえばその数日間は、寝食ならぬおやつも忘れがちになるほどだった。とびぐちの頭とそれを握り締めていた小さな掌の匂いを嗅いでみると、鉄錆くさい匂いに頭がクラクラした。だが、それもまたいかにも鋼鉄の塊にふさわしく感じられた。

そんな使い古されたとびぐちの頭なんか、大人の眼からみたらただの屑鉄、益体も無い廃品にすぎまい。また、そんなガラクタを拾って来てお気に入りのおもちゃにしようと、根気為事に手を染めわざわざ加工を施すなんて、閑も閑なら物好きもいいところの、おかしな子供もいたもんだ。だが、直太は見事やり遂げ、自分だけのお気に入りに為上げて満足し、さあこれからそれとどういうふうにして遊ぼうかとあれこれ思案するにつけ、期待感に彩られた幸福を味わっていた。

手ずから加工し終えた珍品を持って家に上がると、まずは母節子に見せたくて、台所のほうへ向かって元気な声で、

「おかあさぁ～ん、おかあさぁ～ん……」

母親は「なんね、どげんしたとね？」と割烹着の前で手を拭いながら出て来たが、幼い息子の生き生きとした、得意げな顔をまじまじと見て、「ワア汚なさァ！　顔でんどこでん野良犬の仔ンごつ汚れたくって……、早よきれいに洗うといで。アンタ今日はおやつも食べんやったろ？　そんならお腹空いたろだい。もう晩ご飯よ――」

直太は、そんな母親のいう事には耳を貸さず、とびぐちの頭を掲げて見せ、

「ホラどげんね、直太が、俺ィが自分でこげん……」といって指の腹で擦ってみせた、折れ残った柄の断面部分は、ザラザラしてはいたがもうトゲが立ちそうなチクチクした感じはしなかった。「……もう手に刺さらんばい、あそこの石でガシガシッちしたとやけん！」

母親は、いつの間にか自分を「俺」という一人称で呼ぶようになった息子と、その為事の成果を、「へぇー、直ちゃん自分でしたとォ！　あんた頑張ったね、やぁるー！、やろ」と感心してみせた。それで得意満面となった息子の小鼻がピクピク蠢くのを見てから、再び「さあもうご飯やけん、食べる前に手でん足でん顔でんきれぇーいになる迄ゴシゴシ洗うておいで。石けん付けて洗わな汚れがとれんよ――」

一方、その場に居合わせた祖母久代は、直太がその珍品を拾って来た当初から、尖端部が摩耗して鋭利さを欠くとはいえ、直太のように頑是なくて分別の無い子供に持たせておくには、やはり剣呑だと感じていた。それでその時も、文字どおりの老婆心から、

「直ちゃんがそげなとびぐちの頭やら持っとったって、どげん為ンね！」その頃の彼女は、もう暫く経って初夏の頃からは東京に暮らす四女の招きに応じて上京し、向こう約一年間はその娘夫婦の許に身を寄せて過ごすことが決まっていて、それ迄の日数を指折り数えて過ごしていた。だから、今のうちに後顧の憂いを断っておこうと、殊更そこまで考えていたわけでもなかろうが、やや神経質になってはいたろう。「……役に立ちゃせんどころか物騒か、危なかだけたい！」

直太には、まだ四五歳頃に福岡にある節子の実家で姉弟ゲンカして、ちょうど祖父母から土産に貰ったばかりの鉄製の小さな十手で、美奈子の頭を撲いてタンコブを拵えた、前科があった。久代はその話を聞いて、乳くさくて内弁慶の直太でも男の児はずいぶんと乱暴な、無謀ともいえる手荒な真似を為出かすもんだと驚いた。そして直太が小学校に上がった現在も、姉弟ゲンカは絶えないどころか、むしろ激しさを増していた。直太が、劣勢に立たされながらも剛情張って負けを認めず、自分より大きくて強い姉への抵抗を諦めないからだ。そんな直太に、武器にもなる物なんか持たせといて大丈夫か？

だが、直太はそのとびぐちの頭を手放さぬの一点張り、厭だといったら厭だの一念で、

「これ直太ンとやけん（直太のだから）どこにもやらん！」

久代に向かって、歯を思いっ切りイーッと剥き出す憎体の顔を見せつけ、プイッとそっぽを向いて風呂場へ行ってしまった。残された久代は、誰に聞かせるともなく、「誠人が居らんと我が良かァごつしてから……！」だの、「おとうさん（文蔵）が死ぬ間際迄あげん甘やかすだけ甘やかしとったもんやけん、わがままの横着っかつが癖ンなってから……！」だのと繰り言めいた愚痴をいい続けるのだった。

こうした場合、節子は姑の矛先がジワリと直太の母親たる自分の方へと向かって来るのを見越して、

「先が擦り減って丸うなっとっとに、まさか突き刺さりゃせんでしょうたい。あげん気に入っとるとやけん、飽きる迄放っとけば良かじゃなかですか――」そういい残すと、夕飯の支度を続けるべく台所に戻った。

直太は洗い場に下りるととびぐちの頭を、水道の蛇口の下

で撫で廻すようにして洗いはじめたが、そんな手ぬるい洗い方では埒が明かなかった。そこで、亀の子たわしでゴシゴシと全体を擦ってやった。洗い終えると為上げに、自分の躰を拭くのに使うタオルにくるんで、水気を入念に押し拭ってやった。表面を覆っていた汚れが取り除かれた下から、地鉄のいかにも鉄らしい渋い感じの色が現れた。ここ数日の根気為事が報われた気がした。

　直太がおもちゃを使って自作自演する、例の善悪が相剋つ闘争の劇の中には、物自体がどの程度の強度や耐久性を持つか試そうとする「じっけん」すなわち耐久実験の要素が含まれていた。これ迄に数々の玩具がその「じっけん」において脆弱性をさらけ出して壊れ、不具となっていった。おしなべて見かけが派手でケレン味たっぷりだったり、仕組みが凝って複雑だったりすればするほど、壊れやすかった。

　その点、彼が学校帰りに拾って来たとびぐちの頭は、見かけや手に持った感触からして、頑丈さにおいて他の追随を許さなかった。壊れるなんて想像すらできなかった。直太がそれ迄に出逢ってきた、プラスチックや塩化ビニールなどの合成樹脂を主な素材とした玩具類などとは、それこそ異次元の強さが犇々と伝わって来て、世の中にこれほど堅牢な物が他に存在するだろうかとさえおもわれた。

　そうなるとあとは、最初から怪獣なら怪獣を、戦闘用ロボットならロボットをかたどった既製品のおもちゃとは違って、それをいったい何に見立てて遊ぶかが、直太の一大関心事となった。

　――やっぱし軍艦やろ！

　その海戦用に特化した造りの船の実物を、直太は未だ見たことが無かった。だがその模型なら見た経験があって、その柄を折れ欠いたとびぐちの頭は形が船に見えなくもなかったので、軍艦に見立てて遊ぶことにした。折れ残ってわずかに突き出た、ささら状のトゲトゲを直太が苦労してなんとか処理した、その柄を上に向け横たえて眺めていると、ちょうどその突起が艦長たる直太提督が居る艦橋に、猛禽類のくちばしに似た尖端部が波頭を雄々しく劈いて進む舳先（船首）に、それとは反対側の丸みを帯びたところが艫（船尾）に見えてきた。こうした幻視あるいは錯視を可能にする想像力は、人が成長して分別が備わる過程で失われ、爾後「目の錯覚」などと侮蔑されがちだ。しかし、幻視者としての素質に恵まれた直太には、

　――これ、俺ィが軍艦やん！

　一度そう想って眺めるともう、船体が鋼鉄の装甲を鎧った堅牢無比の、軍艦以外の何物にも見えなかった。

　直太に軍艦の模型をみせたのは、四五歳年長の従兄だった。直太が住むその鄙びた小さな城下町から北へ六十キロ弱、特急電車なら五十分足らずで行ける福岡市内には、母節子の両親と姉夫婦が同じ町内に住んでいた。直太も年に幾度かは母親の里帰りに同行して、その従兄に遊んでもらうのが楽しみ

だった。
　手先が器用な従兄はプラモデル作りが趣味で、作り終えた完成品を幾つも本棚に飾っていた。それらの精密模型の大半が戦車や戦闘機や軍艦といった軍事関連の乗り物兼兵器をかたどった物で、節子なんかは甥に対する叔母の気安さから、「セイちゃんなこげな戦争ンごたっとばかり集めて、厭らしか！」無遠慮な口を利いた。「もっと平和な、楽しかごたっとば作りゃ良かとに……」
　だが、その精治という従兄は気に懸ける様子も無く、むしろ彼の自慢の一品を、
「直ちゃん、これがね、世界一の軍艦やった戦艦大和たい。どげんね、凄かろォ、凄い迫力やろォ？」
　そういって見せびらかすだけ見せびらかしておいて、こう釘を刺すのも忘れなかった。
「ばってん、絶対に触らんどきぃよ！　眺めるだけにしときんしゃい。こればもし壊されちゃ堪らんけんねえ！　そン時ゃ、おにいちゃん本気で怒るばい――」
　触れずに見るのはいいが、それも自分がいっしょの時だけ。そして、
――指一本触れることさえも厳禁！
　ふだんは温厚な従兄が直太にそういい渡した、その時ばかりは目の色が変わり、別人のように厳酷な態度で威圧して来た。直太は、急に狭量な人物に豹変した従兄に戸惑いながら、ケチで威張ってて厭だと反感を覚えた。その反感の一端は、戦艦大和の精密模型にも向けられた。それも、外見こそたいそうご立派ながら、従兄が直太への警戒感から目を吊り上げ、突っかかるような物言いをして来るほど、実は脆弱で、非常に壊れやすいらしい点に向けられた。
　その精密模型は、なるほど従兄が自慢するだけあって、実物を細部まで再現した大作だった。大艦巨砲時代を象徴する数多くの砲門を艦上に備え、縮小モデルながら威風堂々たる雄姿が海上を航行可能な難攻不落の城郭を想わせ、どこから眺めてもカッコよかった。それを我が物とする迄には、小遣い銭を節約しお年玉も使わず貯金してようやく買うことができて、さらに組み立て作業には、それ迄にも多くのプラモデルを作ってきたうちで最長の時間と最大の労力を費し、ついに完成に漕ぎ着けたのだという。
「だけんさあ、直ちゃんがちょっとでん壊そうもんなら、その時ゃ、俺、本気で怒るけんね！　俺が怒ったらどげんえずかか（どんなに恐ろしいか）知らんやろ。怒ると俺、怖かとばい！」
　そんなふうに脅されて、直太は厭ァ～な気持ちを味わった。幼い直太が「じっけん」を通して学んだのは、
――物は構造が複雑化して細部まで精密になるほど脆弱さも増し、壊れやすくなる。
　この事だった。従兄ご自慢のプラモデル版「戦艦大和」など、まさにその典型だった。本物は途轍もなく巨大で、分厚い鋼鉄の装甲を鎧って武装した船体には数多の艦砲を搭載し、

主砲なんて数十キロ先の標的めがけて全長数メートルもある巨大な砲弾を雷鳴のような轟音とともに発射し、標的に着弾すれば何だろうと木っ端微塵にできる破壊力を持つ。そんな戦闘能力を誇る主砲ですら模型になると、まるで爪楊枝かそれ以下だ。直太の「じっけん」も兼ねた独り遊びにでも巻き込まれようものなら、いともかんたんに折れ曲がって耐え切れず、他の部分にしたって到底長くはもつまい。およそプラモデルなんて、作り終えたらただ眺めて愉しむためだけの飾り物で、他のおもちゃたちの中で容赦無く揉まれる「じっけん」なんか以ての外。そもそもそういう物なのだといってしまえばそれ迄だが、直太は納得できなかった。いくら見栄えが好くたって、手に取って玩弄すればすぐ壊れるのでは、

――そげなっどん持っとったちゃどげん為ッかん（そんなの持ってたってどうするか）、どげんもこげんも為様ン無かろだん（どうにもこうにもしょうがなかろう）！

そのくらいなら、当時は晩年を迎えていた今は亡き祖父文蔵が直太に乞われるまま、次から次へと三本も買ってくれた、あのいかにも安っぽくてちゃちなおもちゃの刀の方が、ずっとマシにおもえた。チャンバラごっこに打ち興じているうち次第に鐔元から先がふにゃついてきて、やがてぷらーんぷらんするようになったらもうおしまいだったが、それでも思いっ切り振り廻し白兵戦を演じて遊べたからだ。もちの悪さよ、脆弱さよと悪し様にいっても、おもちゃとしての使命を果たして命終えるなら、まだ諦めもつく。だが、そのプラモデルの精密模型となると、

――戦艦大和の何のカンのっちゅうて、そげんすーぐ壊るっごたる弱ォ～わかつなら、敵艦からすーぐ撃沈されてお陀仏やろたい、阿呆ンごて！

直太にとっては、すぐ壊れるイコール悪であり、脆弱なのになまじ見てくれが強そうなぶんだけ侮蔑に値した。

むろん、模型と実物とを、観賞用と実用品とを、虚構と現実とを、直太がいっしょくたにして省みぬ頑迷さを一笑に付すのは、むしろたやすい。だが直太にとって、遊びとはまじめの対極にあるどころか真剣勝負――本気でのめり込んでこその行為で、それでこそ遊びが真底遊びとして成り立つ。だから、無我夢中で遊ぶ最中に壊れて遊び道具としての機能を果たさなくなり、あまつさえ遊戯を阻害するに至ると、

――そげな事っでどげん為っかん、出来んじゃっかん、馬鹿ンごて！

幻滅と興醒めと失望が押し寄せる事態を甚だしく憎んだ。そこで、そうした憎むべき事態を回避するための苦肉の策が、

――じっけん。

耐久実験という恐るべき手段を講じるに至ったのだった。

ところが、直太が学校帰りに拾って来たとびぐちの頭ばかりはどうやら、その「じっけん」すら無意味化する破格の存在であるらしかった。それは、その尖端を持つ鉤爪形の形状から、最初は暴君竜ティラノサウルスの牙か爪を想わせたが部分的すぎて遊びようが無いので、とりあえず軍艦に落ち着

いた。それは、従兄ご自慢の精密模型の戦艦大和なんかに比べたら小さくて不格好で、直太みたいに寸足らずの豆タンクで、艦砲の一門だって備えてはいなかった。だがそこは想像でいかようにも補って遊べる、それでこそ直太なのだった。

《直太艦長が乗船指揮を執る軍艦「とびぐち」が基地を後に海上パトロールへと出港して行く。果たすべき任務は、海の平和と安全を守ることだ。指揮を執る艦長の直太をはじめ乗組員たちの士気は高く、連携が取れていて、操艦技術にも抜群に優れ、最高レベルにある「とびぐち」の性能を十二分に引き出し得る。だが、能ある鷹は爪を隠すとはこの事で、ふだんどおり航行する様は飽く迄も静穏に、今日のベタ凪ぎの海原を滑って行く。

ところが、だいぶ沖へ出たところで、忽然と湧き起こった黒雲は俄かに上空を覆い尽くし、突風が車軸を流すような雨を叩きつけて来て、猛烈な嵐に見舞われた。天そのものが裂け落ちて来そうな稲妻と雷鳴が、海賊退治で鍛えられた剛毅な海の戦士たちをも心胆寒からしめんとするかのようだ。急変したのは空模様ばかりか、海面の様子もまたそれ迄のベタ凪ぎが嘘のように波頭が高まり、船体の周囲でもうねりや渦を生じて、板子一枚の下は地獄といわれる本性を剥き出して荒れ狂いはじめた。

そんな空と海の不穏な激変ぶりに、直太が胸騒ぎを覚えていると、

「か、艦長、あ、あれを……！」

「むうッ？」ふだんは物に動じない直太もおもわず唸っていた。何と、海の中から地獄の使者のような怪物どもが、禍々しく不気味な姿で次々と現れたではないか！

怪物どもの姿は、ふだんおもちゃ箱の中で互いに折り重り雌伏に甘んじている玩具の、怪獣や戦闘用ロボットやプロレスラーそのものだ。彼らは例の「じっけん」でどこかしらに修理が効かぬ故障を抱え、己が運命を恨み世を拗ねて、憐れむべき境遇にある連中なのだ。だが今は海に棲む化け物たちに扮し、艦上の直太たちの前に姿を現した。彼らはその海域を通りがかる船に徒党を組んで襲いかかり、船ごと転覆させて海に投げ出された憐れな人々を頭からシャリシャリ食り喰うのを、無上の楽しみとしている。そんな連中が次々と海面に浮かび上がって来ては、「とびぐち」の船体を周囲から押し包むように殺到して来た。

これにはさすがの軍艦「とびぐち」とその乗組員たちも悪戦苦闘を強いられる。船べりに取り付いた怪物が一匹や二匹なら、エンジンの回転数と出力を急上昇させ、力技で撥ね飛ばすか振り切るかしてしまう。しかし数匹が結束して一斉に左右両舷から揺さぶりをかけて来ては、直太艦長以下、むろん船酔い知らずで操艦技術に長けた猛者たち揃いでも、

――危うし……危うし！

だが、それでもやっぱり「とびぐち」は貨物船や旅客船のような並みの船じゃなく、海上で弱い者いじめする悪者ども

に鉄槌を下すための特別製なので、そうそうかんたんに転覆させられるほどヤワじゃない。波風の影響もあって船は大いに揺れているが、

「なーに、こんなの揺りカゴとそうは変わらん」と直太艦長はいつもの余裕を失わない。

一方、怪物どもはというと、いつもならもう疾っくに船体をひっくり返し、海に放り出された憐れな人間どもに舌鼓を打ってるところなのに、「とびぐち」の抜群の堅牢さと安定感を前におもうにまかせず苛立ちを隠せない。そこで方針転換、作戦変更して今度は船体の横っ腹を力ずくで突き破るか喰い破ろうとして来る。だが今度は今度で、「とびぐち」自慢の鋼鉄製の分厚い装甲が楯とも鎧ともなって全て撥ね返し、貫通など許さぬどころか、逆に角や牙や爪をへし折られてしまう始末。これにはさすがの怪物どもも、これ迄さんざん餌食にしてきた相手とは勝手が違うと苛立ち、内輪揉めの仲間割れをはじめた。そのうち幾分かでも知恵のはたらく者は、容易ならざる相手の正体を薄々覚って怖気づき、浮足立つところ。

そこで直太は、好機到来、反撃開始！　敵の動揺を見澄ましし、満を持して部下たちに反転攻勢の命令を下す。反攻に転じるや「今度はこっちの番だ！」とばかり、まずは架空の艦砲射撃を「どずごーん、どずごーん、どずごーん……」。間髪入れず、やはり架空の魚雷攻撃で「ずしゅんッ、しゅるるるるるる……どっかぁーんッ」。直太の独り遊びが佳境に入ったときの真骨頂で、闘争の場面が善玉の逆襲で盛り上がると、例のオノマトペもひときわ精彩を帯びてくる。飛び道具で敵を慌てさせ、そこに勝機を見出したら一挙に勝負に出る。そうして後の先を取って圧倒的勝利へと突き進むのが、直太の常套手段だ。見よ、効果覿面！　すでに手負いの状態にされた怪物どもが、

「ぎゅわッ、ぎゅわわわわッ、……きゅうぇうぇうぇ、きゅうぇうぇうぇうぇうぇッ……！」と泡を喰って、今や腰砕けの有り様だ。

が、未だ安心はできない。

「ふんッ、ムズ痒いわ！」とふてぶてしくうそぶいて虚勢を張り、「小生意気な人間どもに俺たちに刃向かうとどうなるか見せつけてやれ！」と手下どもを嗾けている奴がいる。敵の首領とおぼしきは、実は地球を侵略しに来た異星人という触れ込みの、頭にはグロテスクな二本角を生やし、手にはフォークを巨大にしたような矛を持つ、なんだか西洋の古典的悪魔像を想わせる姿の一匹だ。彼も直太の「じっけん」のせいで角の片一方を途中から折れ欠いたうえに、肩の嵌め込みもだいぶ甘くなって、腕がスポンッとすぐ抜けて外れてしまうのが最大の弱点だ。最終的には人類を破滅させて地球を征服するつもりだとの野望を吹聴しているが、当面は、この小さな惑星でのさばっている人間たちが仲違いし互いを憎悪し合うよう為向けては修羅場を演じさせ、その様を見物して楽しんでいる。そいつが己の手は汚さずに、

「怯むな、化け物たちよ、人間どもを生きたままムシャムシャ喰ってやれ！」
配下の怪物どもをせいぜい煽り立てているのだった。
直太は、怪物どもによる包囲網を水際立った操艦技術と「とびぐち」の馬力とを駆使して突き破ると、船首を巡らせその首領一匹に狙いを定めるが早いか、出力全開での猛突進を命ずる。船体ごと槍か銛のようになって、敵の急所目懸けて突き刺さって行くのだ。その「とびぐちアタック」という突貫技こそ、どんな飛び道具にもまさる破壊力抜群の、究極の必殺技なのだ。敵を目懸けて突っ込んで行く舳先、その尖端にはまるで破壊の神が宿っているかのようだ。仲間の怪物どもを鼓舞するのに忙しかった敵の首領格が「あッ！」と驚愕の叫びをもらしたときには、そのドテッ腹から背中まで「ずぶぶぶぶぶッ……」と刺し貫いて串刺しにし、そのまま「めりめりめりめりッ、ぴきぴきぴぎィーーーんッ！」と劈いてしまう。
実際には、直太が手に持つとびぐちの頭の尖端部でドテッ腹をドンッと突かれ、ぐりぐりぐりッ、重ねて、ぐりぐりぐりぐりぐりッとさんざんこじられた末に、ゴンッと突き飛ばされた敵は、直太の手を離れ一メートルばかりも先の大海原ならぬ畳の上に、盛大な水音ならぬボテッという感じで落下する。放り出された弾みで矛を持った方の片腕が抜けて、肩からポロッと外れて落ちる。腕を片一方失ったそれをまた直太がすかさず拾い上げて、こりゃ堪らぬとばかり全身をジタバタとノタ打たせながら、「ほぎゃぎゃッ、ほぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃあ〜ッ！」と断末魔の悲鳴をあげ、あえなくお陀仏となる。なまんだーぶ、なまんだーぶ、なまんだーぶ……。
そんなふうに首領格が打ち倒されたのを目の当たりにすると、並居る怪物どもも「こりゃ敵わんわ、相手が悪い！」と戦意を喪失し、「ごめんなさーい、もう悪さはしませんから赦してください、ごめんなさーい、ごめんなさーい……」平謝りして降参し、前非を悔いて改心を誓う。
悔悛を誓った連中には雅量を示し、寛大な心で赦してやる。このように直太の為事は勧善懲悪主義に則って行われ、これにて一件落着、メデタシ、メデタシ――。》

直太は、彼のおもちゃ箱が置かれた三畳間の畳の上に丸い尻を据えて座り、時には立ったりしゃがんだりもしながら独り遊びに興じ、その闘争の劇が正義の勝利でカタが付く迄は飽くことを知らなかった。そして、その独り芝居が軍艦「とびぐち」とそれに乗り組む直太艦長以下勇敢なる船員たち側の勝利に終わると改めて、その古びて程よく摩耗したとびぐちの頭の鋼鉄の肌と、折れ残った木の柄を指でさすりながら、
――あア、俺ァほんに好か拾い物ばした！
ますますその確信を深め、歓喜に耽るのだった。
その日も、直太が例によってそのとびぐちの頭を主役に据えた独り遊びに興じていると、

「直太、そら何ね？」
いつの間に下校して来ていたのか、姉の美奈子が口出しして来た。そこに姉の存在を認めた途端、直太は、心躍る白昼夢の世界からぱっとしない現実へと一気に引き戻された。つまり、軍艦「とびぐち」を駆って海上で人々の安全を守る艦長から、
――一年三組の男子のうち身長が三番目に低くて、ころころ太ったチビ助の、居残り補習の常習者。
そんな素の直太自身へと引き戻されたのだった。己が夢想に酔い痴れて遊ぶ様子を姉に見られた、バツの悪さ。まだ幼稚園生の頃迄は平気だったのに、小学校に上がって芽生えた羞恥心のため、直太は忽ち不機嫌になって、
「せからっさ（煩いこと）、見らんでェ！」
直太がいま手にしているそれは何かと問う姉の質問をけんもほろろに拒絶すると、とびぐちの頭を背後に隠した。だが、姉は鼻で嗤って、むしろ直太がムキになって拒絶的な態度に傾くほど、
「またそげなつば、どっから拾うて来た？」
直太が黙っていると、
「ねえ、どっから拾うて来たとねて？」しつっこく詮索して来るのだった。
「せからしかやん、あっつぁん（あっちへ）行っとけ――」
しッ、しッ……！　と、そういって追い立ててやりたいくらいだ。
だが、姉はしつっこかった。
「何が、あっつぁん行っとけ、か。おねえちゃんが訊きよろうが、ちゃんと答えんね！」
しつっこさにくわえ、姉貴風を吹かせる偉そうな物言いもいよいよ煩くて堪らず、直太は大いに閉口するやら苛立つやら。鬱陶しくて堪らぬ姉の干渉をとにかく逃れたかった。誰が答えてなんかやるもんか！　苛立ちを通り越して怒りすら覚えた。
直太が拒絶的な態度をとるのも、姉に対し不信感を抱くがゆえの事だった。彼女は読書家で言葉をよく知るからか、親たちからも「口から先に生まれて来たような子だ」と評されるほど弁が立ち、直太もよくいい負かされた。だから口論したってどうせ勝ち目が無いうえに、おちおち口車に乗っては後が危ういとすらおもっていた。
直太が姉を敬遠したくなるだけの、たとえばこんな出来事があった――。
まだ幼稚園生だった夏のある晩、父誠人が仕事帰りに大きなカブト虫のオスを一匹、直太のために捕まえて来てくれた。最初こわごわと触れていたが慣れた頃には、直太もその立派な角のある生きた昆虫にすっかり魅了された。
「あんまり弄繰り廻しょっと早よ弱って死ぬけんね」
そういって誠人が、文蔵が生前に水と玉砂利と水草など入れて金魚を飼っていた透明な飼育ケースに、おが屑と木の枝

を入れて飼う準備を整えてくれた。
「うん、直太、こげんやってじっと眺めとく」
直太は初めて我が物としたカブト虫に、いくら眺めても眺め飽きなかった。
ところが、未だほんの一両日しか経たぬ頃、姉が、
「直太ァ、あんたが一生ずっと牢屋ン中に閉じ込められて過ごさやん（過ごさねばならぬ）なら、厭やろもん？」
そういって来たので、直太が、そんなの厭に決まっとると答えると、姉がすかさず、
「カブト虫でんおなじくさい。そげな狭か場所に死ぬ迄閉じ込められとかやんなら、カブト虫でん厭に決まっとろだい。かわいそうかやんね、逃がしてやらんね――」
「うううッ……！」直太は唸った。大好きになったカブト虫を今更手放すだなんて、そんなの厭だ、絶対に厭だ！　街灯の下の路面を這っていたのを、父親が捕まえて来てくれて、飼う準備までしてくれたところなのに、それを逃がしてやれとは……！
直太が困惑していると、姉は掻き口説きにかかった。そんな時の姉は説得に熱が込もるほど、妙に芝居がかった口調になる癖があった。
「カブト虫だっちゃ、どげん頑丈そうにしとったっちゃ、結局は虫やけんね。あたしたち人間よりゃずっと寿命の短うして、どうせ長ぉは生きられはせんとばい。そげな命の短か生き物ば、わざわざこげな狭かとこに閉じ込めて、自由に生きるとば邪魔して喜んどるやら、あんた残酷かろもん。そらあんたは良かろうばってん、こんカブト虫にとっちゃ非道か事ば為ょっちおもわんと？」
姉による説得は、直太の中に罪の意識を喚起し、その罪悪感に苛まれた直太がとうとう堪え切れなくなって、カブト虫を逃がしてやることを承諾する迄、持久戦のように実にしつっこく続けられた。その結果、直太はカブト虫を泣く泣く庭の木の幹に這わせてやる羽目に追い込まれた。カブト虫は桃の木の幹をゆっくりゆっくり這い登って行くと、鈍い羽音を響かせてついに夏の夕空へと飛びたった。直太は、惜別の涙に頬を濡らしながらぼやける目で、カブト虫が飛び去った後の夕空を暫くは呆然と仰ぎ見ていた。
やがて帰宅した父親がその事を知って「アラ逃がしたとか」とやや憮然とした様子でいうのを聞いて、直太は強い悔恨の念に囚われた。そして、
――バカ美奈子が要らん事ばいうけん……！
姉を恨んだのはもちろんだが、彼女の尤もらしい口車に乗った自分の弱さが身に沁みて、暫くはさみしさを引き擦ってめそめそしていた――。

また、こんな事もあって、こっちの方がつい最近だけに印象が鮮やかだった――。
まだ小学校に入学したばかりの頃の直太は、その日、自宅の向かい側にある延応寺の寺域内で独りぼっちで遊んでいた。

本堂の裏手にある墓地の手前は萌え出る若草に覆われた、蛇でも這い出て来そうな原っぱだったが、その原っぱの中央部には楠の大木が亭々と聳えていた。その太い根っ子の一部は地表から上にゴツゴツと隆起していて、根元から放射状に伸びて幹の周りを這い廻るように見えるそれらは、巨大な蛸の怪物の脚みたいだった。直太はその上を伝い歩きして遊んでいた。

だがそのうち飽きてきた頃、その大木の根方に開口部が直径二十センチほどの洞穴を発見し、他にすることも無いので、その辺に落ちていた木の枝と瓦の割れたのをツルハシやスコップ代わりに、ほじくり返しはじめた。と、掻き出した腐葉土みたいな泥土の塊の中から、一枚の古銭が出て来た。

――寛永通宝。

丸い形の中央部に四角い穴が開いた、江戸時代の小額貨幣。直太にとってはただ物珍しくて、持ち帰るとさっそくこびり付いていた泥を入念に洗い落としてやった。そうして改めて穴の周囲に配された四つの文字を眺めているうちに、

――ちさちゃんに見せてやったら、なんちゅうやろか？

神崎智佐子は幼稚園の時からの仲良しの、気立てがやさしいうえにとても可憐な女の子だ。園のお遊戯会では、日本神話の中の「海幸・山幸」の、直太が山幸彦の役なら、智佐子は豊玉姫命の役を演じた仲でもあった。そんな智佐子とは一年生でも同じクラスになって、相変わらず仲が良い。彼女にこの古銭を見せてあげたときの反応を想像しただけで、直太は胸が躍るのだった。

翌朝、小さな肉付きのいい拳の中に古銭をギュッと握りしめていると、姉の美奈子が目ざとくも感づいて、

「直太、あんた、学校行く前に何ば手に持っとっと？」

詮索して来た。

「なんも……」直太は動揺を押しころし、持っとらんよ、としらばっくれようとした。

が、相手はそれで放免してくれるようなお人好しではなかった。いかにも疑り深そうな厭ァな眼つきで、直太の顔を穴が開くほどジーッと見つめて、

「そんなら、グウば握っとるそン手ば、パアち開いてんね。ほら、パアち……！」

「厭アーばい！」

直太は姉の要求を拒んだが、それにより彼女の疑念はむしろ確信へと進んで強まる一方らしく、

「あんたが手に何も持っとらんちいうとなら、ねえちゃんがいうごつパアちしたっちゃ平気やろもん。ほら早よしてん（早くしてごらん）、パアちしてんねって、パアち……！」

姉からのその執拗な追及に遭って、直太は、窮余の策として彼のその小さな手を、パアならぬチョキにして、中途半端に開いて見せた。しかし彼の小さな掌では、とくに伸ばした人差し指と中指を除く三本の指では到底隠し切れずに、かんたんに見つかってしまった。寛永通宝をそこに見出すと、

「ほオーら、あたしがいうたごっじゃろが（いったとおりで

しょうが）！」美奈子は鬼の首でも取ったように勝ち誇ったばかりか、
「ちょっとおかあさん、直太ってねえ、悪かとよオ、昨日拾うて来た古銭ば学校に持って行こうで為ょったとやけん！」
母節子にいいつけたうえに、
「学校で見せびらかすつもりやったとやろが？」
「うんにゃ、見せびらかさん！」言下に否定する直太。
「見せびらかさんとなら、どげなつもりね？　嘘吐くな、馬ァ〜鹿！」
直太の浅知恵でおもいつく程度の魂胆など、先刻お見通し、というわけだ。
だがしかし、誰彼構わず見せびらかそうとしていたという、美奈子の邪推はけっして正鵠を射てはいなかった。直太の本心は飽く迄も、
――ちさちゃんにだけ、こっそり見せてやろう！
智佐子ただ一人を意識してのものだったのだから。小学校でもおなじクラスとわかったときは、ほんとうにうれしかった。彼女もうれしそうだったので、そんな智佐子ならきっと、「こげな昔のお金やら、あたし初めて見た！　直ちゃんが太ォーか木の洞穴ン中から掘り出したち？　へえーッ、ほんなこて凄かやんねェ！」
そんなふうに無邪気に驚き、惜しみ無い感嘆を示してくれるはずだと、密かにそれを期待していたのだった――。
ところが、そんなささやかな夢も姉によって打ち砕かれた。
「ねえねえ、おかあさん、直太がねえ、学校にきのう拾うて来た古銭やら持って行って、誰にでん彼にでん見せびらかそうで為ょったとよオ！」そういって、わざわざ母親に告げ口をしたのだ。それから、自分の言動は飽く迄も正しいのだという自信から、そんな自分への共感や同意を是非とも母親から引き出したいらしく、
「学校には勉強と関係の無か要らん物ば持って行っちゃ出来んごつ決まっとっとに、用も無か古銭ば持って行こうで為ょっやら、直太悪かア〜！　それも、誰にでん彼にでん見せびらかしたかけんちゅうて、学校の決まりば破ろうで為ょったとやけん、ネエおかあさん、直太悪かろ？　ねえ、規則違反やけん悪かろがア――」
すると母親の節子は、直太のランドセルの中身を忘れ物が無いか点検しながら、
「あらアンタ、古銭やら学校に持って行きよったら、失くすたい。それか、先生に見つかったら叱られて、没収ちゅうて取り上げらるったい。そしたら厭やろ？　それが厭なら家に置いて行かんね、ほら、置いて行きなさい。失くさんごつ、おかあさんが預かっとってやるたい、ほら……」
そういって掌を差し出した。直太は改めて姉をいかにも恨めしそうに睨みつけた後、しぶしぶと母親の掌に古銭をのせて寄越した。
「よしよし、そんならおかあさんがここに預かっとくけんね」
受け取った母親はそういって、それを割烹着のポケット

に収めた。
　姉は母親が自分に味方して、直太をもうすこしくらいは厳しく叱責することをまだ期待しているらしく、不満げな顔つきで、
「おかあさぁーん、直太ねえ、あたしに嘘吐いてまでその古銭ば学校に持って行こうで為ょったとよオ。持って行って良かとは学校で必要な物だけち決まっとっとに……」直太の非を鳴らして止まぬのだった。
　だが、節子にいわせれば、身重の躰で家事のほとんどを相変わらず自分でこなしていて、とくに朝のこの時間帯は多事多端で慌ただしく、それにくわえて、おねえちゃんの美奈子に手がかからぬぶんまで手のかかる直太のする事為す事を一々論い叱っていた日には、
　――それだけで日の暮るッ。
　だから、ハイハイと適当に相槌を打ちながら身を入れて聞いてはいないのだった。
　その事を、母節子をも含めて、
　――うちの大人たちは何かにつけ直太に甘すぎる。
　ふだんからそう感じている美奈子は、やや過敏なほど敏感に感じ取っており、その不満まで上乗せしたように、「……要らん物な持って行っちゃ出来んち決まっとっとに！　ほんなこて直太ちゃ（ほんとうに直太と来たら）デタラメでイイ加減で、ロクな事ぁ考えんで要らん事ばっかし為っとやけん、バカばい、アホばい！　学校で先生の言いなはる事でん、どうせいっちょん聞いとりゃせんとやろたい――」
　美奈子は美奈子で、周囲の人たちから「優等生だ良い子だ、さすがおねえちゃんは違うもんだ」と持ち上げられ、それがかえって彼女に自身が抱く生の感情を押し殺させる、何だか褒めごろしのようにすらなっていた。そんなイイ子だけに、母親に正面切って楯突けない、刃向かえない。そのぶんの鬱憤まで、駄々っ子の直太に向けて彼をコキ下ろすことで、その感情の捌け口としているようなところがあった――。
　とにかくこうして姉美奈子の邪魔が入って実行に至らず、古銭を学校に持って行って智佐子に見せてやろうという直太の思いつきは水泡に帰したのだった。
　要するに、直太から見て美奈子は、
　――有難迷惑な姉。
　しっかり者で気が利くだけに、直太が学校で困ったとき何かと手助けしてくれる頼れる救い主となる場合もあれば、気が利きすぎて煩く干渉して来ては、直太の大好きな楽しみ――カブト虫しかり、寛永通宝しかり――を台無しにする、迷惑千万な手剛い邪魔者でもあった。美奈子は彼女の信じる正義や大義名分を標榜して大所高所から、幼稚で愚かで過ち多き直太に対しとやかくいっては掣肘を加えた。だから姉はしばしば底意地の悪い人間と映り、そんな姉のせいで時に無念ともいえる厭ァ～な感じが残った――。
　そんなこんなで今度という今度、虎の子のとびぐちの頭に

関してばかりは、
――じぇったい（絶対）、俺ィがこりば（俺のこれを）どげんかされて堪るもんか！　じぇったい、あン奴の良かごつぁさせんとやけんな！
己にそう強く誓うところへ、目ざとくも姉がさっそく眼をつけ来て、
「そら何ね？　どっから拾うて来た、ねえ、どっから拾うて来たとねて？……」などといって来ても、まともに相手になっては敵の術中に陥るだけだ。そうならぬためには、敵と同じ土俵には上がっては駄目だ。そこで、
「知らぁ～ん――」
これが一番。姉の尋問には、彼女がなんといって来ようとも、まともになんか答えない。思いっ切り黒眼を上に寄せて白眼を剥き、だらしなく口をダラァ～と開け、知らぁ～ん、で通す。とっておきのバカ面のアホ面をここぞとばかり見せつけてやるのだ。
「知らぁ～ん」の「らぁ～ん」のところは、思いっ切り、べぇーッ、と舌と鼻の下を伸ばして、いってやるのだ。一度この手で行くと決めたら徹頭徹尾、
「知らぁ～ん……、知らぁ～ん……」もうこれしかいわず、終始一貫、これで通すに限る。
すると案の定、姉も最初のうちこそ、「ふうーん、そうですか、やっぱりねえ、バカばい。可笑っさア～、あんた、ほんなこてアホやなかと」などと毒のある薄笑いを浮かべ、いつものケンカの時のように底意地の悪い憎まれ口を叩きながら、挑発してきた。だが馬鹿でも阿呆でも、自らそれに徹する覚悟を一度決めた以上は、
「知らぁ～ん――」
これで相手がバカだのアホだのと挑発して来ても、自分から買って出てそうなっている以上は通用しない。そうなると、ふだんはすぐ頭に血が昇る直太が平気でいて、逆に落ち着いている姉がすっかり頭に血を昇らせ、
「自分が今そればおもちゃにして遊びょったくせに、なんが『知らぁ～ん』か！　直太、アンタやっぱりアホやなかね！　自分がいま手に持って遊びょる物ば、どこからどげんして持って来たつか、そげな事っでんわからんごたんなら、ほんなこてバカばい、こげなバカはおらん！」
クソミソにいったが、自らバカになり切った直太には痛くも痒くもない。そこで、また、
「知らぁ～ん――」
さすがの姉も構うだけ無駄だとおもったらしく、
「こげなバカ、相手にしたっちゃ時間の無駄やん……」捨て台詞を残して退散した。こうして姉を、あえて狂ったフリをする佯狂に似た手段を用いて追い払った、直太だった。

【九】

直太が下校して来ると、母親は出かける用意をしていて、
「おかあさんこれから京町まで買い物に行ってくるばってん、

ついて来る？」
　いつもなら、節子にそう声をかけられると帰宅直後でも疲れた様子もみせず、「うん」と首肯く直太だが、珍しくその日は、
「うんにゃ、今日は良か――」
　首を横に振った。例のとびぐちの頭を拾って帰って来てからというもの、友達が誘いにでも来なければ、それを軍艦に見立てた独り遊びに興じていた。しかし、いつも軍艦にばかり見立てて遊ぶのも芸が無く、いささか飽きが来ていた。そこでその日は、別の物に見立てて遊んでみようとあれこれ考えながら、これまた珍しく寄り道せず道草も喰わずに帰って来たのだった。
　すると節子は、
「そんならすぐ帰って来るけん、おやつば食べてお留守番しときなさい――」そう言い残して急いで、その日の晩ご飯に必要な食材を買い足しに出かけて行った。
　直太を連れて出ると概ね帰りが晩くなる。その鄙びた小さな城下町だからデパートと呼ばれて通用している小さな小さな百貨店、そこの出入り口の脇に入っている軽食と喫茶の店でたこ焼きを喰わせてくれろとせがんでみたり、上の階の玩具売り場で、ねだらないからおもちゃを見せてくれろといって聞かなかったりする。ゆえに、いつもかつも直太の要求に応じるわけではもちろんないが、いくばくかの時間やお金を費やすことになりがちだった。
　それに、だいぶ強くなったとはいえ、小学校に通いはじめてまだ躰がじゅうぶん慣れたとはいい難い直太が、疲れからまた熱でも出したら大変だという心配もあった。
　入学前迄の直太はころころと太っている割には、とくに季節の変わり目などよく扁桃腺を腫らし、小さな躰から湯気でも立ち昇りそうな高熱を発して寝込んだ。小さな心臓がトックントックン鳴って脈拍が異常に慌ただしく、呼吸もふだんよりはずいぶんと荒くなり、床に臥せっていても天井がグルグルと回転して見えるほどの堪え難い眩暈と嘔吐感に襲われ、苦悶して喘いだ。ようやく熱が下がって体力を取り戻すため何か食べようにも、扁桃腺の腫れが退く迄は咽喉が塞がって固形物は嚥み込めず、そのため重湯にちかい粥とりんごの搾り汁などを啜っている状態が暫く続いた。
　だから小学校に入学する直前の春休みに扁桃腺の手術を受けた。麻酔もかけずに無理やり咽喉の両脇にある扁桃腺を切除するのだから非常な激痛を伴う、これが果たして現代医療なのかとおもわれるほどの荒療治――野蛮で残酷な手術だった。そのかわり、睡眠中のいびきが減るとともに風邪を引きにくくなり、したがって風邪をこじらせ高熱に喘ぐ頻度も減ったようだった。だがもうすこし躰が大きくなって抵抗力が付く迄は、無理をせず、用心するに越したことは無いのだった。
　直太は、おやつの揚げせんべいをそそくさと食べ終えてしまうと、その甘辛味の揚げ菓子の、焦げた香ばしい砂糖醤油

と植物油の味が残る指を未練がましくねぶりながら、手持ち無沙汰にぼんやり考えていた。例のとびぐちの頭を軍艦にばかり見立てるのにも飽きが来ていて、他に何かおもしろい趣向はないかと思案していたのだ。

するとそのうち、

――リカちゃん。

あの姉が至極大切にしていて直太には指一本触れさせてくれないアイドル人形の、見るからに人好きのする容貌が眼間に浮かんで来た。そして、一度想い浮かんだら最後という感じで、脳裡を占めたきり離れて行かなくなった。

直太がちょうどあの、このままでは殺されるかとおもえるほどの激痛を体験させられた、野蛮で残酷な扁桃腺の手術を受けた頃――その年の三月に、祖母久代が姉の美奈子を伴って上京した。久代の四女で父誠人には妹にあたる、東京の叔母に招待されての上京だった。その度の東京見物を目的とした上京が機縁となって、今度は久代が一人で夏前ごろに上京して、それから向こう約一年間にわたりその四女の家に身を寄せ、東京暮らしを楽しんでみてはどうかという話が持ち上がり、とんとん拍子で実現に漕ぎ着けようともしていたのだが、それはまた別の話。とにかく小学校が春休みに入って、そのあいだの約一週間、美奈子は久代とともに上京していた。そして東京のいかにも都会的な、目にするもの耳にするもの全てが物珍しいような風景やら風物に触れ、それらへの陶酔と憧憬とを旅行鞄一杯に詰め込み、名残惜しさを引き擦って帰って来た。

その東京滞在中、叔母や従姉妹たちに案内されて首都のど真ん中、つまりこの国の中心部を物珍しげに巡り歩くなかで、日本橋か銀座あたりの百貨店で美奈子が叔母に買って貰ったのが、そのアイドル人形「リカちゃん」なのだった。

美奈子は、ごく幼かったまさに幼児期にこそ、キューピーさんのようなお人形相手にままごと遊びをしていたが、まだ小学校に上がる前の幼稚園児の頃にはすでに、お人形さん遊びを卒業していた。だがそんな彼女も、リカちゃんの程よく整ったいかにも愛らしい顔立ちや、しゅっと伸びたスマートな肢体や、田舎育ちの眼にはファッションモデルを想わせる髪型や服装など、それらにはすっかり魅了されたようだった。おませな彼女はその例外的な事態について、口ではやや言いわけがましく、

「東京のおばちゃんからせっかく買うて貰うたとやけん……」

だから貴重で、だから自分はその思い出のよすがとしてのそれを大切にするのだという意味の事をいっていた。だが本心では、どこもかしこも都会的に洗練され垢抜けたおしゃれな少女のイメージ、それを一体のうちに具現化し偶像化した、そのお人形さん自体に強く惹きつけられ、その抗し難い魅力にすっかり虜となったようだった。とはいえ、リカちゃんを相手におままごとじみたお人形さん遊びを、とくに家族であれ人前でするようなことは、絶えて無かった。すでに早熟な文学少女の面影が備わりつつあった彼女にとって、無邪気に

お人形さん遊びになんか現を抜かすことは、自身を直太並みの幼稚さにまで後退させることを意味し、それには相当な抵抗感――彼女なりの衒いから生じる照れや羞恥心――が付きまとったからだ。そのかわり、彼女専用の学習机の前の棚のいちばん目につきやすい場所に安置して、密かに「おはよう」「行って来ます」「ただいま」「おやすみ」その他、朝な夕なに話しかける習慣が出来ていた。そしてよく愛おしげに自分のブラシで髪を梳き整えてやっていた。

そんな美奈子にとって、リカちゃんに指一本触れさせたくない人間の典型、代表格が誰かといえば、いわずと知れた直太だった。だからしょっちゅう、

「直太、あんた、おねえちゃんのリカちゃんに触らんとよ。ぜったい触ったら駄目。もし勝手に触ったりしたら承知せんけんね――」そういって、諄いくらい念を押していた。

だから、魔がさしたという他なかった。直太は、その時の自分というものを後になって振り返ってみても、どうしてそういう行動をとったのだったか、よく想い出せないのだった。ただ、祖父文蔵の寝室だった一間を主亡き後は姉の勉強部屋として活用している、その家で唯一の洋間にふらりと入って行ったのは、確かな事実だった。物が無造作に置かれ、ややもすると遊び道具と勉強道具とが乱雑に積み重なっている直太の机上とは違って、南東の隅に置かれた姉の勉強机の上はきれいに整理整頓され、机の前の本棚には愛蔵書がきちんと並べてあった。

そして、その本棚の下の小物を収納する狭い空間には、工作の時間に紙粘土を捏ねて作った花弁の形をあしらったペン立てと並んで、姉が東京の叔母に買って貰った件のお人形さんが腰掛け、こちらへ頬笑みかけていた。

アイドル人形の「リカちゃん」は、まるで拒むということを知らぬかの友好的な、まさにフレンドリーな笑顔を振りまき誘いかけて来た。

「ねえねえ直ちゃん、遊びましょ――」

自制を呼びかける祖父文蔵のかそけき囁きが耳朶を掠めたようだったが、直太はロクに聞いてはいなかった。何よりリカちゃんの誘惑のほうがまさって、

――うん、そげんいうなら、ちょっと遊んでやろかね。

このお人形さんにしたって、

――ただ飾られとるばかりじゃ退屈でつまらんやろう。

愉しくひと遊びし終えてから、姉が学校から帰って来る迄にこの場所に返しておけばいいのだ。何も問題は無い。そう自分にいい聞かせ、そっと掬い取るような手つきでその胴体のくびれた辺りを持つと、直太のおもちゃ箱が置いてある、いつも彼が独り遊びに興じる三畳間へと連れ去った――。

「『じっけん（後篇）』へとつづく」